

# 第50回 福島県中学校長会研究協議会 県北大会 報告書



霊山／伊達市公式ホームページより

とき 令和4年10月7日(金)  
ところ 伊達市立梁川中学校  
(オンラインによるハイブリッド開催)

## 目次

◇ 写真記録（開会式，講演会，分科会）	1
◇ 大会要項	4
◇ あいさつ 福島県中学校長会会長 渡部 光毅	5
県北大会実行委員長 阿部 央	6
◇ 講演会記録	7
◇ 分科会記録	
第1分科会	22
第2分科会	24
第3分科会	26
第4分科会	28
第5分科会	30
第6分科会	32
第7分科会	34
第8分科会	36
◇ 編集後記	38



伊達市立梁川中学校

# 写真記録（開会式・講演会）



## 写真記録（分科会）

【第1分科会】



【第2分科会】



【第3分科会】



【第4分科会】



【第5分科会】



【第6分科会】



【第7分科会】



【第8分科会】



## 大会要項

# 令和4年度第50回 福島県中学校長会研究協議会 県北大会

- 1 大会主題 「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく  
日本人を育てる中学校教育」
- 2 主 催 福島県中学校長会
- 3 共 催 福島県教育委員会 福島県市町村教育委員会連絡協議会 伊達市教育委員会  
桑折町教育委員会 国見町教育委員会
- 4 後 援 伊達市 桑折町 国見町 福島県小学校長会 日本教育公務員弘済会福島支部
- 5 期 日 令和4年10月7日（金）
- 6 会 場 ハイブリッド開催

◆現地参加：県北地区中学校長、実行委員、北会津支会（※希望者）

発表者・司会者・運営委員・記録者・進行の会員

現地会場：伊達市立梁川中学校

伊達市梁川町字菖蒲沢 141 番地 6 TEL. 024-577-4972

◆Web参加：会員各校・・・現地参加以外の会員

## 7 日 程

9:30	10:00	10:20	10:45	12:15	13:15	15:30	15:35
受付	開会式	休憩	講演会	昼食 ・ 休憩	研究協議		閉会式

○講演会 10:45～12:15

・演題 「感染予防対策の徹底と、コロナを言い訳にしない教育」

・講師 伊達市教育委員会教育長 菅野 善昌 氏（第46代会長）

○研究協議 13:15～15:30

### 福島県中学校長会会長

渡部 光毅



第50回福島県中学校長会研究協議会県北大会が、東に阿武隈山系の霊山、西には吾妻連邦、北には宮城県境の美しい山々に囲まれ、幕末から昭和初期にかけて養蚕業によって栄え、蚕都とも呼ばれる歴史とともに発展してきた、ここ伊達市立梁川町を会場に開催できましたことは誠に喜ばしく、全会員の皆様方とともに心から喜び合いたいと思います。

また、日頃より本県中学校教育の充実・発展のため、特段のご指導並びにご支援をいただいております福島県教育委員会教育長、大沼博文様並びに伊達市長、須田博行様から開会に際し、書面によるご挨拶を賜りましたことに厚く御礼を申し上げます。

さて、隔年で開催されておりますこの本大会は、第44回いわき大会から中学校長会単独の開催となり今回で4回目を迎えました。しかしながら、一昨年に予定していた第48回会津大会は新型コロナウイルス感染拡大により開催が困難との判断から、やむを得ず中止となりました。本大会の準備に際し、当初は参集型による開催を計画しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の収束が予測できない中で、確たる見通しを持つことへの不安を払拭できない状況が続いていることから、感染状況から受ける影響を軽減するため、会場への参集者を原則として県北地区の各支会のみとし、他の会員はWEBによる通信機能を活用した参加とするハイブリット型の開催といたしました。

大会史上初のハイブリット開催となった本大会には、今年度に昇任等により新任として中学校にお勤めいただいている25名を含む209名の校長先生方が参加されました。コロナ禍と言われるこのような時期だからこそ、オンラインによる参加者を含めた県内全ての中学校長が一堂に会する意義は今後さらに重要になるものと考えています。

令和4年度の研究主題は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」であります。現在のわが国は、急激な社会変化やグローバル化、急速に進む情報化や技術革新など大きな転換期を迎えています。学校教育においても、学力・体力の向上、ネット社会での生き方、いじめや不登校への対応や心と命の教育等の課題が山積しており、私たち校長には、教育の専門家として課題を正しく把握し、その解決に向けて新しい時代にふさわしい学校教育を創造していくことが求められています。本大会で実施した「教育課程」「学習指導」「道徳教育」「健康・安全教育」「進路指導」「生徒指導」「教職員研修」「経営課題」の8つの分科会では、発表者質疑の他にブレイクアウトルーム機能を活用したオンライン参加者によるグループ協議も行われ、どのグループも活発に意見交換する姿が見られました。限られた時間ではありましたが、互いに高め合い、深め合ったその成果を、それぞれの支会や各学校運営に生かすことで、子どもたちの「生き抜く力」の育成に寄与していただきたいと考えます。

結びになりますが、本研究協議会県北大会開催にあたりまして、ご指導並びにご支援を賜りました福島県教育委員会様、福島県市町村教育委員会連絡協議会様、伊達市並びに桑折町、国見町の皆様及び関係各教育委員会様、公益財団法人日本教育公務員弘済会福島支部様に対しまして、心より深く感謝申し上げます。

そして、万般にわたり企画、準備等にご尽力をいただきました実行委員長の阿部 央校長先生をはじめ役員・委員の皆様、伊達・福島・安達支会の校長先生方に対しまして、衷心より感謝を申し上げあいさつといたします。



伊達市のシンボル名峰「霊山」、霊山の紅葉は見事な錦絵のようです。「献上桃の郷」桑折町、奇跡のりんごと呼ばれる「王林」の原産地でもあります。源義経ゆかりの国見町、桃、りんご、あんぼ柿の味は格別です。

山々が色づき始める美しい季節に、新型感染症対策によるハイブリット開催ではありますが、ここ伊達市立梁川中学校をメイン会場に、第50回福島県中学校長会研究協議会県北大会を開催できますことを大変嬉しく思っております。前回予定されていた会津大会が中止となりましたことから、実に4年ぶりの開催となります。

さて、現在、グローバル化の進展等によって世界全体が急速に変化し多様化しています。生産年齢人口の減少、人工知能（AI）の飛躍的な進化をはじめとする絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は変化の一途をたどっております。近い将来を予測することすら困難な時代になったとも言われています。

これからの未来を担う子どもたちは、明確な正解のない問題・課題に直面したとき、それを自分事として考え、多様な他者と知恵を出し合い、協働して、時に力強く、時にしなやかに乗り越えていく資質・能力を身に付ける必要があります。このことはまさに、教育に携わる私たちに課せられた使命であると考えます。しかし、学校現場においては、深刻化するいじめや不登校、SNSを介したトラブルへの対応のほか、教職員一人一人の働き方に対する意識を醸成しながら、学校における「働き方改革」も推進していかなければなりません。このような山積した課題を前に、校長は明確なビジョンを示し、リーダーシップを発揮して解決に向けた取組を着実に進めていくしかありません。

このような中、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」という新たな研究主題を指標とした8つの小主題による共同研究を推進してきました。

本大会において、研究協議を深めるとともに、成果や課題の共有を図り、今後の学校経営のさらなる充実につながる実り多い大会にさせていただきたいと願っております。

ところで、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の発生から11年7月の歳月が流れました。

建物や道路の状況に目を向けると、きれいに整備され復興が進んでいるようにも見えます。しかしながら、人々の生活に目を向けると、現実はまだ復興の道半ばであり、数多くの人々が生まれ育まれた故郷を離れ、悲しみと苦しみに耐えながら生活している現実があります。発災直後、「学校は復興の最大の拠点」を合言葉に、子どもたちの心と体を守るため、そして、教育環境の復旧・復興のため、数多くの困難を乗り越えてきた教職員も、時の流れとともに少なくなってきました。また、震災を経験していない子どもたちが、間もなく中学校に入学してきます。平成29年9月30日に福島県中学校長会が発行した「福島県中学校七十年史」に、第46代会長の菅野善昌先生が特別寄稿をされております。そこには「震災、原発事故からの復興は息の長い取り組みである。まさに「学校は復興のシンボルであり、活力源である」ことを再認識し、しっかりと地に足を付けた着実な歩みを進めてほしいと願うものである。」という言葉が記されています。あの日の出来事を風化させないための取組がこれまで以上に必要であると考えます。

今回の県北大会は「福島」「安達」「伊達」の3つの支会が協力して準備に当たってきました。とりわけ伊達支会8人の校長先生方には、昨年11月から準備にご尽力いただきました。また、本大会のメイン会場として使用させていただきます伊達市立梁川中学校様には大変お世話になります。

結びになりますが、本大会の開催にあたりご指導、ご支援を賜りました福島県教育委員会、伊達市、伊達市教育委員会、福島県中学校長会をはじめ、多くの関係機関、諸団体の皆さまに心から感謝申し上げます、挨拶といたします。



## 講演会記録

演題：「感染予防対策の徹底とコロナを言い訳にしない教育」

伊達市教育委員会 教育長 菅野 善昌 様

改めまして、校長先生方、こんにちは！

国内で、新型コロナウイルスの感染が確認されてからまる3年になろうとして



ていますが、未だ収束に至っていません。ただ、ワクチン接種等の対策により、徐々にではありますが、これまでの生活を取り戻しつつあるような気配もちょっと感じられるようになりました。しかし、感染状況は予断を許さないことには変わりはありません。

また、この3年間、日常生活、そして経済活動は、これまでの常識が通用しない状況に陥りました。こうした状況の変化は、教育界においても、多くの変革と臨機応変な対応を迫られることになったことは周知の通りです。

そのような中、各校長先生方には、感染症の基本的な予防対策の徹底と同時に、子どもたちの学びを止めないための創意・工夫を講じながら、日々学校経営にご尽力をいただいています。

まず、このことに心から感謝を申し上げるとともに、敬意を表する次第です。

最初にこれまでのことを振り返ってみます。2年半前、現在の中学3年生は、小学校の卒業式もままならない中、コロナ感染症という不安を抱えながら中学校に入学した学年です。さらに、入学後、間もなく一斉の臨時休業も余儀なくされました。様々な活動もこれまでで最も制限された中での中学校生活のスタートでした。

令和2年の3月以降、現場の校長先生をはじめ教職員の皆さんは、これまで経験したことのない環境の中で、「新型コロナウイルス感染症対策」とともに、「新学習指導要領の全面実施」そして「働き方改革の推進」という大きな課題のもとに、今も多忙な毎日を送っておられると思います。

また、「GIGAスクール構想」の前倒しによって、一人一台の端末と校内ネットワークの整備が急速に進みました。このことによって、教育界のデジタル化も一気に進みました。さらに、対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイブリット型の授業への移行も加速化しています。加えて、デジタル教科書の活用も現実的なものとなってきています。まさに教育現場は、「学びの多様化」に向けて「学びの質の大転換期」を迎えているといえます。

このように、難しい課題が山積する中で、感染対策と子どもたちの学習保障の両立を目指して、少しずつではありますが歩を進め、現在に至っています。現場の校長先生方をはじめ、教職員の皆さんには本当に頭が下がる想いです。

ところで、コロナウイルスに関しては、少しずつですが医学的にも詳細が明らかになってきているようです。しかし、コロナと向き合っていかなければならない時代はまだ続きます。校長先生方には、子どもたちの生命や安全を守ることを最優先にしながらの学校経営ということで、困難を極めることもあろうかと思いますが。ぜひ皆さんの英知を結集するとともに、校長会の組織力も生かしながら、私たち行政とともに力を合わせて、この難局を乗り切っていきたいと思いますので、どうか、よろしくをお願いします。

ところで、私もウイルスについてちょっと調べてみました。すると、「ウイルス」は、人類よりはるかに長い歴史を持っていることが分かりました。これまでも、地球環境や人々の行動の変化に伴って、その時代を特徴づけるような感染症（例：ハシカ、ハンセン病、マラリアなど）が流行したといわれています。そして、これらの感染症が流行すると、人間は、そのたびに、大きな社会構造の変化に適応してきたのだそうです。つまり、この「ウイルス」というものは、社会構造をも変化させてしまうような大きな力を持っているということなのです。実に、驚きです。

一方、病気の原因となるウイルスですから、“厄介者”扱いされやすいのです。しかし、このウイルスが役立っている面もあるといいます。例えば、ここ20年ほどの研究で、ほ乳類の胎児をウイルスが守っていることが分かってきたのだそうです。もう少し具体的にいうと、「おなかの中に赤ちゃんが宿ると、母親の胎内の常駐ウイルスといわれるものが集まってきて膜を作ります。この膜が、赤ちゃんを包み込みこむことによって、母親からの免疫系の攻撃を遮断できることが分かった。」というのです。つまり、ウイルスがいなければ、子どもは母親の体内で死んでしまうようなのです。逆に、言い換えれば、ウイルスが「我々人間の命をつなぎ、この世に生かし続けてくれている」ということにもなります。

このような話を知るにつけ、私は、今回のコロナウイルス感染症は、「人間として地球上に生きる私たちに、改めて「生命」や「生き方」について問いかけているのではないか」と思わされるのです。

さて、今日は、校長先生方に何をお話すればよいか、大変悩みました。

コロナ感染症の蔓延によって日本の社会構造は様々なところで大きく変わってきています。そして、教育もまた大きな転換期を迎えています。コロナ感染症は、全国一斉の学校の臨時休業措置をもたらしました。この、全国一斉の臨時休業は、「学校が担っている本質的な役割やその機能の重要性」を、否応なく改めて社会に強烈に印象付けることになったと私は思っています。

そこで、今日は、テーマを「感染予防対策の徹底とコロナを言い訳にしない教育」として、改めて「教育の機能」や「校長先生の役割」を確認したりしながら、コロナ禍における教育の方向性について思うことを話させていただきます。なお、誤解のないように補足しておきますが、「コロナを言い訳にしない教育」という言葉は、決してコロナ感染症が蔓延している中で、ゴリを押しながらやみくもに学校教育を展開するという意味ではないということをまずご理解いただきたいと思えます。

さて、社会・経済が動き始めたのと合わせて、この9月26日からは感染者の全数把握が簡略化され、感染者の発生届が必要な対象者は、高齢者などの重症リスクが高い人に限定されるようになりました。このような現状から見ると、当初の新型コロナウイルス感染症対応の頃から比べると、社会全体のコロナに関する考え方は緩い方に変わってきています。しかし、社会全体がそのような雰囲気の中で進むとしても、小・中学校教育の段階の子どもたちは、心も身体も大きな成長を遂げる発達途上にあります。教育現場を預かる私たちにとっては、子どもたちの「生命」、「安全」、「健康」を最優先にして学校運営や行政運営に当たっていかねばなりません。そして、これからの社会を「たくましく、しなやかに生き抜いていくことができる児童・生徒の育成」に向けて、今後もコロナと向き合っていかなければなりません。今日は、コロナ感染症への対応と学校教育の両立に向けて、改めて気を引き締め直すという機会とも位置づけながら、本日の話を進めたいと思えます。

## 1 コロナ禍によって問い質された学校の役割

これまでも、私たちは、東日本大震災や原子力発電所事故、そして令和元年度の東日本台風など、数々の災害を経験してきました。このような災害のたびに、私たちは普通の日常生活をごく当たり前に送ることが出来ることの幸せと素晴らしさを感じてきました。

一方、今回の新型コロナウイルス感染症は、これまでの各種災害とは性質が全く異なっており、世界的な感染爆発の中で、私たちに大きな脅威をもたらしていることは事実です。

ところで、新型コロナウイルス感染症の蔓延以前は、学校の臨時休業がなかったわけではありません。校長先生方は十分ご承知のように、台風や地震などによって特定の地域や学校の実態に応じて、子どもたちの生命と安全を守るという観点から、個別に「臨時休業」という措置がとられてきました。しかし、2年半前のようにコロナ感染症の予防対策として、長期にわたった全国的な学校の臨時休業はこれまで経験したことがありませんでした。2年半前の、緊急事態宣言の発令による3月4日からの学校の全国一斉臨時休業、そして、新学期スタート後間もなくの再度の臨時休業というように、臨時休業の長期化によって学校の機能は長期にわたってストップしました。このことは、「学習の場がなくなった」ということのみならず、

学校がもっている機能とその役割の重要性が、大人そして社会から改めて見直されたと思っています。

そこで、これまでの2年半を振り返って、学校の機能と役割について整理してみたいと思います。

#### (1) 学校における2つのカリキュラム

学校におけるカリキュラムについては、皆さんご存じのように大きく2つのカリキュラムがあります。次の2つです。

① 正規のカリキュラム・・・体系的に整備された正規の教育課程

② 隠れたカリキュラム・・・「ヒドウンカリキュラム」といわれるもの

私が学校の臨時休業の長期化の中で改めて強く感じたこと。それは、学校において見えないところで極めて大切な作用として働いている「隠れたカリキュラム（ヒドウンカリキュラム）」なのです。この「隠れたカリキュラム」の意味について、ある資料に次のようにまとめられていました。

「教育する側が意図する、しないに関わらず、学校生活を営む中で、児童生徒自らが学び取っていく全ての事柄を指すものであって、学校・学級の「隠れたカリキュラム」を構成するのは、それらの場のあり方や雰囲気であるということが出来る。」

ところで、日本のこれまでの学校教育の歴史というものを踏まえると、学校のイメージとしては「勉強するところ」という捉え方が一般的であると思います。では、「学校」からイメージできる「キーワード」としてどんなものがあげられるでしょうか？

「授業」、「給食」、「約束」、「きまり」、「先生」、「友だち」、「集団」、「協調」、「我慢」等々でしょうか。

その他、さらに考えてみると「楽しみ」などもあるかと思います。しかし、学校のイメージのキーワードとしてはどちらかというところ「緊張」とか「難しそう」とか「大変そう」という印象の方が強いと思います。

つまり、今あげたキーワードに関するようなことが学校生活の「隠れたカリキュラム」としてあげることができます。よく考えてみると、いずれも教育上、また、人格形成上も、非常に大切なことではないかということに気づくのです。そして、これらのキーワードは、もちろん学校における様々な教育活動において、「友達と協調する」とか「我慢強い」「約束を守る」などのように、目的として掲げられるものもあります。

当然のことながら、子どもたちは登校すれば学校という場に身を置くことになります。そのことによって、子どもたちはおのずとこの隠れたカリキュラムの影響を大きく受け

ているということになります。まさに、隠れたカリキュラムは「人格形成の基盤をなしている」といえるのです。

しかし、今回は、新型コロナウイルス感染症の影響によって臨時休業が大変長期間に渡ってしまいました。子どもたちが学校に行かない。行くことができない。このことは、つまり、学校が備えている「隠れたカリキュラム」のもとに子どもたちを置くことが出来なかったということです。結果、基本的な生活習慣や食習慣、学習習慣の乱れやゲーム依存など様々な問題が表面化して、不登校の子どもたちの増加の一因ともなっていました。

このことは、体系的に整備された「正規の教育課程」と並んで、この「隠れたカリキュラム」は、「学校にとっても非常に大事な機能を果たしている」と言うことを、改めて社会に強烈に示したと感じました。

ぜひ、この機会に学校における「隠れたカリキュラム」の重要性を再確認し、その充実を図っていかねばならないと考えています。

特に、子どもたちの人権感覚の育成には、この「隠れたカリキュラム」が極めて重要であるといわれています。

## (2) 人権感覚の育成と「隠れたカリキュラム」

ここで、「人権感覚の育成」に関して、「いじめ」の例をあげながら「隠れたカリキュラム」について考えてみます。

子どもたちに「いじめ」を許さない態度を身につけさせるためには、「いじめはよくない」という知的理解はもちろん必要です。しかし、これだけでは不十分です。実際に「いじめ」を許さない雰囲気浸透している学校・学級で生活することをおして、子どもたちは、はじめて「いじめ」を許さない態度を身につけることが出来るのです。であるからこそ、教職員が一体となつての組織的な対応と場の雰囲気づくりが大切といえます。

具体的に例を挙げれば、

- 級友とのトラブルを訴えた児童生徒の声を、教職員が真剣に受け止めようとしないので聞き流して何も対応しようとしない。
- 教職員が、他の同僚や保護者の悪口を、平気で子どもたちの前で口にする。
- 職員室での教職員間の会話がなく、冷たい雰囲気が漂っている。

このような学校では、いくら「いじめはやめよう」などと語りかけたとしても、子どもたちの心には決して響くことはないと思います。逆にそれにとどまらずに、見えないところで「いじめ」をしたり、「いじめ」を見ても、見て見ないふり（傍観）をしたりす

ることを助長してしまうようなことになりかねません。

### (3) 望ましい「隠れたカリキュラム」の実現のために

前述したように、学校には、自校の教育の方針に照らして体系化された正規のカリキュラムがあります。しかし、もう一つの「隠れたカリキュラム」は、今「例」としてあげたように、教育の本質を追求していく「学校が備えるべき極めて大切な機能」を有しているといえます。

従って、教職員間、児童生徒間、教職員と児童生徒間の人間関係とか、学校・学級の全体としての雰囲気などは、まさに学校教育の基盤をなすものなのです。この基盤をより確固たるものにしていくためには、まずもって教職員一人一人の人権尊重の理念への理解を深め、「隠れたカリキュラム」の重要性をしっかりと認識する必要があると思います。

よく、「子どもたちにとっては、教職員の存在そのものが大事な環境である」と言われます。その理由が、ここにあるのです。

教職員同士が、互いに考えを聞き合う、言い合う、受け入れる、提案し合うなどのような活動を大切にしながら、様々な研修を学校全体で進めてほしいと思います。

### (4) 「隠れたカリキュラム」がぜい弱になってきていないか？

これまで触れてきたように、「隠れたカリキュラム」は、先生方の教えや学校生活、学校制度そのものの裏に潜んでいるものを、子どもたちが非言語のコミュニケーションをとおして学び取っているのです。ですので、子どもたちはある内容を教えられていても、その内容と同時にいろいろなことを学び取っているということです。従って、学校の中ではそういった隠れたメッセージが子どもたちに伝えられて、子どもたちは自覚的に、あるいは無自覚的に「規範」とか「価値」、「信念」「知識」などを「隠れたカリキュラム」の中で学び取っているということになります。

ところで、現状を振り返ってみると、私はコロナ感染症の影響によって「隠れたカリキュラム」が無意識のうちに少しずつ削られて、ぜい弱になってきているような気がしてならないのです。コロナ禍によって、学校における行事や学年全体などでの活動が減っていることは事実です。しかし、「隠れたカリキュラム」の重要性を踏まえたとき、各学校では、「学校全体としてどのようなことができるのか」ということについて、「学習活動づくり」や「人間関係づくり」と「環境づくり」などとを一体化させながら、様々な活動への価値づけや意味づけの再検討をしていく必要があると思います。

今、学校の多忙化解消（働き方改革）も大きな課題になっています。様々な行事をはじめとした諸活動を見直すときには、この隠れたカリキュラム

が果たしている役割も十分に考慮しながら検討を進める必要があると思っています。

## 2 感染予防対策の中 ～ 教職員同士そして子ども理解のために ～

今、コロナ感染症予防のために「マスクの効果的な活用」や「三密の回避」「黙食」などの措置がとられています。学校における子どもたちのコミュニケーションの場は、大きく様変わりしました。このような中で、少しでも「豊かなコミュニケーション」を築いていくための自分の気持ちの持ち方について考えてみたいと思います。

### (1) 自分の地図

突然ですが、先週から10月に入りました。「10月」と言えば、皆さん一人一人は何を連想されるでしょうか？

「秋」「読書」「スポーツ」「食欲」「文化祭」「とんぼ」「夕焼け」・・・(もちろん子どもたちは、生活経験が浅いため、連想する幅も小さいはずです。年齢が大きくなるにつれて多様な発想になるでしょう)

次に、別の例をあげてみます。

**【例】** 教室で理科の勉強をしているとして、「氷が解けると何になる？」

学校での理科の時間の答えは「水になる」でしょう。しかし、大人にこの質問をすれば「春になる」と答える人も多いのではないのでしょうか。このように、同じ言葉を聞いても、そこから連想するものは、人それぞれに違います。同じ出来事を体験しても、捉え方や感じ方が違います。

このことは、わかりやすく例えていうと、「人間は皆、自分の内面に地図を持っている」といわれます。ここでいう「地図」とは、日常的に様々な言葉や出来事などに出くわしている私たちが、外から入ってくる情報を理解するために使っている記憶や体験を集めてできた「参照データ」のようなものなのだといわれています。確かに、これは一人一人皆違うはずです。

### (2) 五感をとおして得たもの

さらに、私たちは、見る(視覚)、聞く(聴覚)、触れる(触覚)、匂う(嗅覚)、味わう(味覚)の五つの感覚(五感)を通して、自分の外側の情報を受け取っています。そして、受け取った情報を理解するために、先ほどあげた自分の「内面の地図」を参照して、その情報に意味を与えたり、解釈をしたりしているのです。

次に、別の例を挙げて考えてみます。次のフレーズの〇〇にひらがなで、皆さんはどんな言葉を入れますか？

○ やめられない、〇〇〇〇い。[とまらな](カルビー)

○ わんぱくでもいい、〇〇〇〇〇育ってほしい。[たくましく](丸大ハム)

これらは、CMなどで聞き覚え(あるいは見覚え)があって、すぐに言葉

が浮かんだ方が多かったと思います。

では、このフレーズに入れる言葉を選ぶ際にどんなプロセスをたどったでしょうか？よく考えてみてください、おそらくこんな感じではなかったでしょうか？

① 文字を見る。(情報を得る) ⇒ ② 頭の中の記憶を参照する(自分の内面の地図と照らし合わせる) ⇒ ③ それを言葉にする・・・  
こういった作業を無意識のうちにしていたと思うのです。

次に、このようなフレーズではどうでしょうか。

○ 私はコレで〇〇〇〇を辞めました。[会社] (禁煙パイポ「マルマン」)

○ 体はよけた。それでも〇〇〇〇〇〇〇った。[煙はぶつか] (JT)

これらもある企業のキャッチコピーですが、最初の例ほどすぐに言葉が出なかったかも知れません。それでも、コマーシャルや広告になじみのある人は、決まり文句が出てきたでしょうし、なじみのない人は「自分の価値観や信念などを反映させた言葉」を選んだ(フレーズにあてはめた)と思います。いずれにしても、これまでの記憶や経験で作られた「自分の地図」を頼って言葉を探したものと思います。

このように自分の地図は、これまでの体験や記憶をもとにできていて、人それぞれ違います。

その違いによって同じ言葉を聞いても、そこから連想するものが違ってきますし、同じ出来事を体験しても、それに対する考え方や捉え方が変わってきます。ですから、同じ世界に生きていても、持っている地図が皆それぞれ違いますので、一人一人ものの見方や感じ方が違って当然ということになります。

### (3) 自分の地図と相手の地図

これまで話してきたように、私たちは、自分の地図の中に生きているということになります。

私たちは、外の世界の情報をありのままに理解しているのではなくて、自分の地図に照らし合わせて意味を与え、その意味づけをもとに、外に向かって発言をしたり、行動をしたりしているのです。ですから、ある人(Aさん)の発言や行動を受けた周りの人は、その人なりの地図を通して、Aさんのことを理解しているということになります。

このように、私たちは、現実の世界に生きているとはいわれますが、実は、その世界を映す自分の地図の中に生きているといわれています。

もし、これから心に余裕があれば、他人と接したりするとき、「人それぞれ違っていかまわらない」ことを根底において、「自分の地図と相手の地図」を感じてみてはどうでしょうか。そして、学校の管理職としても、同



僚の教職員の地図を感じ、できるだけ尊重してみてもいいでしょうか。結構冷静に物事を見つめられるようになると思いますし、それだけでコミュニケーションの質も変わってくるのではないかと考えています。このようなことは、「子どもたち」についてもいえるのではないのでしょうか。

### 3 学校の舵取り役としての校長

さて、現在、校長先生方が最も神経を使っているのが、子どもたちの生命と安全にかかわるコロナ感染症への対策だと思えます。一方、最近では、地震や大雨などの自然災害が多くなっていると感じます。また、学校事故や不祥事の絶無に向けても各学校で細心の努力をいただいているところです。それに伴って、学校の最高責任者の校長先生方にとって、危機管理はますます重要度が高くなってきているといえます。

そこで、例話を紹介しながら、この危機管理について考えてみたいと思います。

#### (1) 俯瞰する力（リーダーのあるべき姿）

(わかりやすい話から)

「時代は、大航海時代前期。一艘の帆船が黄金の国ジパングを目指して航海中であつた。母国の港を出て一ヶ月、航海は順調であつた。しかし、自然はそう甘くはなかつた。かつて経験したことのない大嵐に見舞われた。大嵐は、十日経っても収束の気配はなかつた。さて、船中をのぞくと、不思議な光景が目に見えだした。水夫である奴隷たちと船長を含む上級幹部たちが身分の違いを超え、この苦難を乗り越えようと共にオールを漕ぎ、ともに汗をかき、苦楽をともにしているではないか！身分を超えた同士としての美しい感動のドラマが繰り広げられていたのである。」

ここまでの話を読んで、皆さんはどう感じたでしょうか？

いい話です。(船長も、幹部も奴隷も身分の差をなくして苦楽をともにしています。)

しかし、この話には、続きがあります。その後の話は、次のとおりです。

「神の視座からこの船中の人間ドラマを見た。すると、何と！周囲たかだか4～5キロメートルの海域をぐるぐる回っていただけだったのである！」

この話で、振り返ってみたいことがあります。この船は、10日間も、周囲4・5キロメートル程度の海域をグルグル回っていただけだったので。

果たして、「船長や上級幹部は、これでよかったのでしょうか？ まずいとすれば、何をすべきだったのでしょか？」ということなのです。

皆さんお気づきのように、美談ではいけないですね。船長や上級幹部はこれではいけないのです。船長や上級幹部は、「羅針盤や今でいうGPS（人工衛星を利用して位置を測定する仕組み）を持った人であるべき」だったということなのです。

つまり、「俯瞰する力」＝ 高い所から広い範囲を見下ろし眺めることができるような能力・・・を備えた人間でなければならなかったと思うのです。

具体的にいえば、「俯瞰する力」を持って大嵐に見舞われた現状を客観的に把握しながら、事態の改善を目指して指揮・誘導をする、まさに「舵取り役」としての船長や上級幹部でなければならなかったということです。そうであれば、もっと早く大嵐から脱出して、順調に航海を続けることができているはずなのです。

私は、危機管理の一つとして、校長先生方にはこの「俯瞰する力」がとても大切だと思っています。

この情景を学校に置き換えれば、船長は校長、上級幹部は副校長や教頭ということになるでしょう。学校では様々なことが起こります。緊急時には、即座に判断を下さなければならないときもあります。まさに学校の最高責任者＝「校長」そして、それを補佐する副校長や教頭の使命が問われることとなります。危機の場面に直面したときは、この「俯瞰する力」を発揮しながら、的確な方法で独自に危機を乗り越えていかなければなりません。

管理職には、必要不可欠ないくつかの資質・能力があります。しかし、「俯瞰する力」を備えた危機管理能力はその筆頭にあげられること。これを、皆さんと共に肝に銘じておきたいものです。

このコロナ禍対応においても、教職員や子どもたちの心身の健康や安全確保という点から、危機管理が重要であることは変わりありません。危機管理というものは、すぐ身近なところにありますし、広範囲にわたります。日ごろはそれほどに重大な事故はめったに起きないといってもよいでしょう。(起きたら、それこそ大変なことです)ですので、危機に対する意識がともすると薄らいでしまいがちです。しかし、可能性としてはいつ起きてもおかしくないものなのです。このような基本認識で、危機管理に当たってほしいと思います。

## (2) 校長と職員の危機意識

ところで、私は校長と一般教職員では、教育に対する様々な意識がかなり違うと思っています。当然といえば当然なのですが、それを意識して学校経営に当たることができるかどうか、

これで、かなり成否は分かれると思います。特に「危機意識」については、失礼では

ありますが一般教員のほうがはるかに低いということに注意しなければなりません。

校長先生方は、物事を全体的、多面的、複眼的に見ているはずで、そして、たとえ自分の学校や身近で大きな事故や事件が起こっていないとしても、当事者意識をもって事態を見ているはずで、起きた事件や事故を「対岸の火事」のように見えていないはずで、しかし、一般の教職員はそこまではいきません。

学校では、校長と一般教職員との「危機意識の違い」を理解させ、そこを埋めていく取り組みが校長には求められると思っています。

校長の意識として、一般の教職員は自分とは同じではない。自分より危機意識は低いということを念頭に置いてものごとに当たること。このことは、危機管理上極めて重要であると考えています。

#### 4 コロナ禍の中で

次に、今回のコロナ禍における各学校の取り組みや、子どもたちの取り組みをとおして感じたことについて触れてみます。

2年半前の国の緊急事態宣言の発令による急な全国一律の学校の臨時休業以来、校長先生方も、これまで本当に大変な日々を過ごしてこられたと思います。様々な活動の制限、規模の縮小、時間の短縮なども含めて、計画しては中止や変更の連続。そのような喪失感が漂っている中で、各学校や子どもたちの取り組みからは、私も多くのことを知ったような気がします。

##### (1) 子どもたちの新たな学校づくり・・・新たな価値の追求

様々な行事に対して、「また中止・・・!」。その言葉が幾度となく耳に入ってきました。運動会や学習発表会、文化祭、合唱祭、修学旅行、校外学習、部活動の諸大会など。そのたびに、私もやりどころのない悔しい思いを抱きました。しかし、各学校から届く「学校だより」や「学級だより」、そして、本市の子どもたちが投書した「新聞への掲載記事」などを読んでとても驚き、新たな取り組みに感心しました。

##### 【投書の紹介】

福島民報新聞  
令和2年11月3日付け  
伊達市立伊達中学校  
当時3年生

多くの行事中止  
工夫が思い出し  
伊達市・吉田峻  
(中学生 14)

新型コロナウイルスは  
私たちの生活を制限し  
当たり前の日常をどこ  
と奪っていった。  
私たちは、感染予防の  
ため、三密回避をシ  
ャルティスタンス、マ  
スク着用をさまざま  
と心がけて生活してい  
るが、多くの学校行事が  
なくなった。  
私たちがして最後の  
中体、二年生の時から準  
備していた修学旅行。将  
来のための体験入学。他  
にも、思い出さる行事  
が中止になった。  
だから、世間は私たち  
を「かわいそう」と思  
うことがあるかもしれな  
いが、学校側も中止にな  
った行事に代わりになる  
ものを用意してくれ、そ  
れなりに私たちも楽しむ  
ことができました。  
生徒会副会長の私は、  
限られた時間の中で文化  
祭を企画し、何とか盛り  
上げようと工夫した。初  
の試みである生徒会企  
も、コロナ対策をしながら  
る学生に楽しんでもら  
い大成功だったと思う。  
「工夫次第で思い出しに  
る最大の行事を成し遂げ  
る「工夫できる」という  
ことを学んだ。

この文章を読んで！（感じたこと）

様々な行事や活動が中止や縮小になるなどして、生徒たちを「かわいそうだ」と、大人も含めて思うことがあるかもしれません。しかし、当の本人たちは、「自分たちはできないことを嘆くのではなくて、この状況だからこそできることを見出しながら、まさに創造し、工夫を重ねる中で、思い出に残る最高の行事を成し遂げた」という満足感・成就感を味わうことができたということなのです。つまり、子どもたちは、「新たな学校づくりを始めた」というように私は感じました。

さらに、オンライン文化祭などをはじめ、子どもたち手作りの修学旅行や遠足、球技大会など・・・子どもたちは、逆境の中で、新たなものを自分たちの手で作り上げていくパワーと柔軟性を持ち合わせている頼もしさにも気づきました。

## （2）学びの対象・・・大人（教師）の姿

一方、このコロナ禍、子どもたちの健康・安全の確保は最優先です。しかし、同時に、子どもたちの「学び」をしっかりと確保していくことも求められているのは承知の通りです。ですが、この「学び」というのは、教科の学習だけではありません。子どもたちは、学校での集団活動を通して、いろいろなことを学んでいます。先に述べた「隠れたカリキュラム」においてです。

そこで一つ、当然のことであっても、再度確認をしたいのは、大人の姿（学校においては、教職員の姿）も、子どもたちの重要な学びの対象になっているということです。

今、直面している「コロナ禍への対応」は、今回の学習指導要領改訂の背景としている「予測困難な社会をどう生きるか？」という問題を私たちに突きつけていると思うのです。

今、まさにかつて経験したことのない「未曾有のコロナ感染症にいかに対応するか」ということが問われているのです。この予測困難な「コロナ禍への対応こそ、今、大人（学校においては教職員）が手本を示していかなければならない時」のような気がするのです。

しかし、先ほど紹介した生徒の投書のように、生徒たちは、「かわいそうだ」などと周りから同情されることを乗り越えて、この逆境の中でできることを模索しながら、新たな価値を追求する子どもたちの姿へと変容しています。私は、この変容を促している最大の力が、まさに、学校における教職員の姿なのではないだろうか、強く思うのです。

改めて、教師の姿（教師が子どもたちに向かうときの心持）が、子どもたちの重要な学びの対象になって、子どもたちを啓発する大きな力になっ

ているということを肝に銘じたいと思っています。

そして、この間、一気に進んだICTに、私も教職員も四苦八苦しています。しかし、教職員を超えて、子どもたちも素晴らしい吸収力でICTを使いこなしてきています。今まで通りのやり方では乗り越えられない事態、短期間での変革の必要性に迫られる状況下であっても、多くの先生方は、持ち前の創造力や行動力を生かしながら、指導方法を工夫したり、新しいアイデア生み出したりしています。このような力こそが、新しい時代の学校教育を創っていく原動力になるのではないかと思います。

## 5 コロナを言い訳にしない教育

### (1) 諸活動における意義や価値の見直し・・・質の向上

コロナ禍における学校の教育活動も2か年半が過ぎました。今年の夏は「オミクロン株BA-5」系統への置き換わりが進み、感染が急激に拡大して第7波となりました。コロナ禍は、まだまだ予断を許さない状況が今後も続くと思われまます。コロナ感染症に感染したり、濃厚接触者になったりすれば、数日間には自宅療養や自宅待機をしなければなりません。

このような状況を踏まえながら、このコロナ禍が長期化する中で、私は特に懸念していることがあります。それは、このコロナ禍で、子どもたちは様々な制約を受けたり、常に感染への不安を抱いたりするなど、これまで経験したことのない日々はずう～っとさらされ続けているということです。そのことによって、自身はもちろんのこと、周りの様々な事象に対しても否定的・消極的な見方や考え方が染みついてしまいはしないかということです。

小中学生の時代は、とにかく毎日出くわす新たな体験や発見、これが次の学びの土台となります。そして、心も体も飛躍的に成長するときです。その大切な時期にコロナ禍は、子どもたちの豊かでたくましい成長に大きな影響をもたらすと考えています。従って、今、教育現場ではこの子どもたちへの影響を少しでも減らしていくための取組を、これまで以上に意図的・計画的・継続的に進めていかなければならないと考えています。

学校における最優先事項は、子どもたちの命や健康、安全を守ること、つまり、新型コロナウイルスに対する感染防止対策を徹底することです。その上に立って、私が常日頃から想っていることは、「コロナを言い訳にしない教育の推進」そして、「コロナを言い訳にしない子どもたちの育成」です。具体的に言えば、コロナ禍というネガティブな状況を理由として、「～の理由で〇〇ができない（〇〇をしない）」というように、消極的・否定的な対応をしたりしないこと。そして、「コロナのせいで！（云々）」

というような安直な受け止め方に終始しないということです。大切なことは、コロナ感染症の発生以前に行っていた学校の行事や諸活動はベストなものであったとは限らないという認識のもとに、再度行事や諸活動の教育的な意義や価値をしっかりと見直しながら、感染防止対策とのバランスをとって教育活動の質をよりよいものにしていかなければならないということです。さらに、創意工夫を生かした教育活動をとおして、子どもたちに「未来志向的な考え方」を培いたいものです。そして、「自分の生き方を深く考えさせながら、将来への目的意識とたくましさを醸成」していかなければならないと考えています。

今の子どもたちが、数十年経った社会の中で、周りの大人から悲観的なイメージや、負のイメージを持って『やっぱり、コロナ世代だから・・・「〇〇ができないんだ」』例えば、「ひ弱なんだ」とか、「コミュニケーションが苦手なんだ」、「協調性に欠けるんだ」・・・などつつぶやかれないようにと願ってやまないのです。代)・・・コロナ禍（2年半）だからこそ培われた力を生かすことが大切です。

次に紹介するのは、「コロナ禍の若者も、ポジティブな意識で頑張ろうとしている」例です。

福島民報新聞 令和4年6月25日付け

福島市 福島高専4年 村上 紗彩（18）さんの投稿

※ タイトル：「コロナで生まれた強みを生かした社会に」

コロナ禍で行事が中止され、期待と異なる学校生活を送っている。4年ぶりの文化祭を盛り上げようと実行委員を務めている。

感染対策で導入されたオンライン授業は時間や場所に縛られない教育方法を示した。社会の変化を踏まえた政策を望む。感染症の理解も進んできた。対策は継続しながら、自由な行動や経済活動を推進すべきではないか。政府は世界に目を向け、リーダーシップを発揮してほしい。

この文章は、コロナ禍で育った強みが生かされる社会を期待している若者からの力強いメッセージであると思うのです。この先は、感染症だけではなく、地球温暖化による天災、そして理不尽な戦争など紛れもなくさらに予測ができないVUCA（ブーカ）時代に入るといわれています。（VUCA時代・・・先の見通しがつかず、目的の達成に向けて従来の方法が通用しない、方法を変えざるを得ない時代の意味）

この厳しい2年半を乗り越えてきた各校長先生方は、つらいこともたくさんあったと思います。しかし、この2年半を経験して、工夫に工夫を重ねながら、教育活動を新しいものに創り変えて来られました。そして、保護者や地域住民の皆さんの期待にも十分に応える力を有していることを、

私も確認することができました。

ぜひ、校長先生はじめ現場の教職員の皆さんには、コロナ禍の子どもたちが背負ってしまっている「ハンディ」とか「コロナ禍だからこそその気づきや経験」、これらを「生きていく上での強み」に変えていくための子どもたちへの働きかけを大切にしてください。そして「予測不可能な時代をたくましく生きていく大人としての姿」で子どもたちに向き合ってほしいと強く願ってやみません。

現場の校長先生はじめ教職員の皆さんの、今後ますますのご活躍とご健勝をお祈りして、私からの話とさせていただきます

ご清聴ありがとうございました。

## 分科会報告

### 第1分科会

- 【発表者】 本宮市立本宮第二中学校 三津間 勝彦 双葉町立双葉中学校 大沼 俊之  
【司会者】 二本松市立二本松第二中学校 大和田 康夫 浪江町立なみえ創成中学校 馬場 隆一  
【記録者】 いわき市立大野中学校 渡邊 文暁  
【運営委員】 二本松市立安達中学校 遠藤 幸栄 檜葉町立檜葉中学校 早川 良一  
【責任者】 須賀川市立長沼中学校 須藤 瑞穂 福島市立飯野中学校 佐藤 晃

#### 1 発表の概要

##### (1) 【安達支会】本宮市立本宮第二中学校

###### ① 研究の趣旨

学習指導要領では、新しい時代を切り拓いていくための資質・能力を育成することを目指している。そのことから、社会に開かれた教育課程を編成・実施・評価することで、教育活動の質の向上に努めるためにも、カリキュラム・メーカーとしての校長の役割が重要である。その認識の基、成果のあった実践を共有するとともに、共通の課題を明らかにし、より充実した教育活動の展開に向けて研究を進めることとする。

###### ② 考察

アンケート結果から、教科横断的な取組における課題や地域人材の活用と地域連携の在り方に認識の差が見られた。さらに、各学校の実践から、学校アンケート項目の改善、教科横断の指導体制の工夫、新たな視点からの地域連携の在り方には成果が見られた一方、地域等の人的・物的資源の活用に伴う業務増加に課題が見られた。

##### (2) 【双葉支会】双葉町立双葉中学校

###### ① 研究の趣旨

未だ東日本大震災の影響は大きく影を落とし、避難先で教育活動を再開せざるを得ない学校、元の町村に戻り学校を再開しているものの課題を抱えている学校など、現状は様々である。そこで、各学校がその実態に応じながら、創意工夫を凝らした特色ある教育活動を推進するため、絶えず評価に活用し、教育

活動の質の向上に向けて、研究を進めることとする。

###### ② 考察

それぞれの学校の状況は様々であるが、実態や課題を踏まえ、研究の視点を明確にして、校長の働きかけとして有効な手立てを模索することにより、課題解決が図られ、一定の成果を得ることができた。



#### 2 協議内容

##### (1) 教育活動の質の向上は図るPDCAサイクルを機能させた教育課程の実施と改善の在り方について

###### 【グループA】

◇ 今後においても新たなものを構築していく必要はあるが、スクラップすべきものを見出し、新しい試みの体制づくりを校長として進めていくべきである。

◇ 学校評価アンケートの質問項目については、自校の実態を把握しながら質問項目の見直しをする必要があると考える。

###### 【グループB】

◇ 学校評価の質問項目については、学校運営ビジョン等の柱になるものは質問項目を



変えずに経年変化で、その変容を見ていく必要があると思われる。

- ◇ P D C Aサイクルの機能を果たすために学校行事ごとに担当した教職員を中心にアンケートを実施し、その結果について全体での共有を図った。

#### 【グループC】

- ◇ 現行の学習指導要領や社会情勢としてのSDGsの観点から、これまでにはない新しい取組をキャリア教育の視点から見直すということも非常に有効な手段であるという意見が出た。

- ◇ 学校運営協議会の在り方について意見も出たことから、地域の方々からいただいた意見を取り入れながら、P D C Aサイクルに落とし込んでいく必要性も今後求められてくるであろう。

- (2) 地域の人的・物的資源を有効に活用し、地域社会との連携・協働を深めた教育課程の編成・実施について

#### 【グループA】

- ◇ 地域性を前面に押し出しながら学校をアピールすることも必要であろう。特に、技能教科等においては、地域からその専門家を招いて、授業の質の向上を図ることも有効である。学校のニーズに応じてもらうために地域との連携を図ることは、地域への貢献でもあると捉え、今後も積極的に地域との連携を深めていくべきである。

#### 【グループB】

- ◇ 地域の人的・物的資源を有効に活用するためには、やはり総合的な学習の時間を生かすべきである。自治体等で運営している人材バンクの活用とともに、体験学習等の実施可能な施設の確保により、より充実した教育活動の展開が期待されるはずである。

### 3 まとめ

- (1) 二本松市立安達中学校 遠藤幸栄

- ◇ なぜ社会に開かれた教育課程にしなければならぬのかという視点では、やはり地

域から人的・物的資源を効果的に導入することが、学校に刺激を与えるとともに教育の質の向上そのものにつながれると考えるからである。

- ◇ 学校教育の目的の実現のためには、教科横断的な視点をもった学校経営が学力向上、さらには体力向上に効果があると考えられる。だからこそ、校長が中心となってカリキュラム・マネジメントに携わる必要が生まれるであろうし、教育活動の質の向上を図るためには、校長自らがカリキュラム・メーカーになる必要があると考える。

- (2) 檜葉町立檜葉中学校 早川良一

- ◇ 双葉支会の現状としては、一つの町村に一つの小学校、中学校、もしくは義務教育学校が存在しているというのが現状であるが、東日本大震災後の現状に鑑みても、一度崩れたコミュニティをより戻すためには、何といたっても学校再開が何よりも大きな効果を示すものである。そのためには、その期待に応えるべく様々な創意工夫を凝らした教育活動を展開し生徒たちにチャレンジ精神を植え付けることが大切である。しかしながら、生徒数が少ない分、生徒さらには教職員にも負担過重を与えているのが現状である。だからこそ、その学校や生徒の実態に応じたカリキュラム・マネジメントを展開することによって、学び深い学習へとつなげていきたい。



## 第2分科会

【発表者】	天栄村立天栄中学校	濱津 太	喜多方市立大和中学校	菅野 泰英
【司会者】	須賀川市立仁井田中学校	中潟 宏昭	喜多方市立第一中学校	板橋 和典
【記録者】	金山町立金山中学校	野口 幸哉	喜多方市立第二中学校	押部 秀隆
【運営委員】	須賀川市立第一中学校	八木沼孝夫		
【進行係】	田村市立常葉中学校	佐久間 誠		
【会場係】	福島市立大鳥中学校	熊谷 幸司		

### 1 発表の概要および質疑

#### (1) 岩瀬支会での取組について

天栄村立天栄中学校 濱津 太

校長を対象に、授業改善に関する意識調査を実施した。各校とも校内研修や校長による指導助言等により授業改善の工夫への意識は高い。また、授業においてICT機器の効果的活用が図られてはいるが、言語活動や情報活用能力の育成のための組織的な取組には課題が見られる。

3つの視点から各校の課題に応じて選択した内容による実践研究を進めた。視点(1)の実践は、外部講師招聘による校内研修会、ミドルリーダーの育成。視点(2)の実践は、情報機器活用の環境整備、総合的な学習の時間における探究的な学びの推進。視点(3)の実践は、学習評価計画表の作成が挙げられる。

実践研究については、緒に就いたばかりであり、成果や課題が明らかになるのは、これからである。学習評価の工夫については、さらに深い研究が必要である。

Q (守山中) 学習評価の基準を作成する際苦労された点は。

A 初めての作成に不安を抱える教員もいたが、試案を期首面談で提示させ管理職が指導助言を行い対応した。



#### (2) 耶麻支会での取組について

喜多方市立山都中学校 菅野 泰英

授業改善を柱とし、校長としてどのような教育活動を推進していけばよいかを明らかにする。研究を進めるうえでは、校長が具体的な方策を明らかにする必要がある。そこで研究の方向性・視点を焦点化し、研究を推進した。

視点(1)の実践は、授業研究を柱としたICT機器活用による授業改善、リーディングスキルを意識した授業改善、道徳科による校内研修の推進、ふくしま「未来の教室」授業充実事業との関連による授業改善等。視点(2)の実践は、縦割り活動の授業や行事での取り入れ、自己表現の場を適宜設定し諸活動と連携を図る工夫等が挙げられる。

ICT機器の活用を通じた授業改善の実践が多く見られ、校内研修や外部機関の研修との連携を図りながら教職員の意識改革を行い、授業改善に繋げる手立てが有効である。

Q (行健中) リーディングスキルテストの結果を授業改善にどのように活かすのか。

A 国語等での読み取りにおいて、結果を意識した発問を取り入れているが、その成果については研究を継続している。



### 3 協議内容

視点1 「個別最適化された学び」「協働的な学び」「探究的な学び」の学びの変革の実現に向けた教員への意識付けと組織的な授業改善について

視点2 全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題を発見し解決する能力を育むための教科横断的な指導の充実と組織体制づくりについて

Aグループ 授業においてICT機器を有効活用するにあたり、教師間のスキル差がネックとなる。その差を埋めるため、外部講師招聘、中学校区内の小中間での授業研究会などを通してスキルアップを図る取組が各校においてみられる。また各教科において、ICT機器の活用を通して子どもたちにどのような力を身に付けさせたいかを明確にし、活用場面を精査したうえで、年間指導計画内に位置付けることも必要である。

Bグループ 授業改善に向け生徒間の学力差を克服するために、一人一人へのきめ細やかな支援が大切である。またICT機器の活用に向け、人事評価の面談時に教職員一人一人の自己目標を明確にし、PDCAサイクルをもとに校長が指導にあたることも必要である。探究的な学びは、総合的な学習の時間での実践が多く見られる。地域の特産物の栽培および加工品の開発など地域の特色を活かした取組や、子ども議会において住みよい街づくりを提案する取組などが挙げられる。

Cグループ 個別最適な学びにはICT機器の活用が有効である。その有効性を教職員が実感するためにも、職員間で使用法等の情報を共有し、実際に授業に取り入れ実践を積み重ねるなど、現職教育を活用した取組が求められる。言語活動の充実にもICT機器が活用できる。各生徒が『ロイノート』や『Jamboard』といったアプリを用いて自分の意見をアウトプットすることにより、他の意見と対比し自分の考えをより一層深めることができる。

### 4 まとめ

(1) 須賀川市立第一中学校 八木沼孝夫

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各校で校長がリーダーシップを発揮し、実態や課題に応じて様々な取り組みがなされている。

各生徒に、グローバル社会の中で今まで経験したことのないような新たな課題を解決する力を身に付けさせるためには、従来の教師主導による一斉指導では対応できない。教員が協働的な学びの必要性を実感できるよう意識改革を進めなければならない。

学習評価の工夫にはまだまだ課題が見られる。生徒の実態と評価、評定が乖離している懸念がある。試行錯誤を繰り返し、今後も練り上げていくべきである。岩瀬支会発表の、全教科で評価計画を作成する事例は大変参考になる。

2年目、3年目と引き続き各校において校長がリーダーシップを発揮しながら研究を継続することにより、社会が求める資質・能力を生徒一人一人に身に付けさせることができる。

(2) 喜多方市立第二中学校 押部 秀隆

校長は一人職のため、視野がなかなか広がりにくいところがあるが、本日の発表から様々なヒントを頂くことができた。各学校地域の特性や学校規模の大きさになどにより実情は異なるが、大切なのは校長として自校の課題を正しく把握し、確実に解決していくことである。

授業改善を進める上ではICT機器の活用がポイントとなる。耶麻支会の発表に、ICT機器は活用が目的ではなく手段であるとあった。その手段に差があり、活用すべき土台を創る必要性がある。現職教育をとおして教職員一人一人の意識改革を進めるとともに、個々のスキルアップを図らなければならない。

学校全体が学習指導に力を注ぎ一体となって実践するためには、教職員が同じスタートラインに立つことが必要不可欠であり、また教職員一人一人の健康が大切となる。その条件がそろうことで、校長としてのリーダーシップが十分に発揮されマネジメントが機能する。

### 第3分科会

【発表者】	田村市立都路中学校	榊原 康夫	檜枝岐村立檜枝岐中学校	飯塚 敏明
【司会者】	三春町立三春中学校	渡辺 和也	南会津町立田島中学校	室井 正之
【記録者】	郡山市立宮城中学校	宗像 克典		
【運営委員】	田村市立船引中学校	助川 徹	下郷町立下郷中学校	我妻 雄比古
【責任者】	中島村立中島中学校	亀田 征利	福島市立西根中学校	川名 健一

## 1 発表の概要

### (1) 田村支会の取組について

田村支会（9校）では「つなぐ」をキーワードに実践を行い成果が見られた。

#### ○ 教職員の協働的な校内体制の構築

- ・ 三春中 校長・担任の協働的な授業実践（課題解決型の道徳）担任と校長が分担して資料作成の準備。日程調整し全学級で実践予定。
- ・ 小野中 保護者アンケートの実態を踏まえ、各学年ごとテーマを設定。学年教師間で相互参観し授業力向上。

#### ○ 地域連携による学校マネジメントの充実

- ・ 船引南 小・中、学年間でローテーション道徳。小6と中1が合同で道徳授業。「生命の尊さ」同じテーマで異なる学級（学校）で授業。反省を活かした授業改善。
- ・ 都路中 小・中学校保健委員会と連携実践。学校保健委員会ががん教育講演会を実施。がん当事者である講師からの話は考える問いとなった。

#### ○ 質疑

喜多方市立会北中学校 佐久間 徹

「小中学生の意見交流、難しさは？」

- ・ 小学生の積極性が中学生に影響。中学生に先輩の自覚が促された。

### (2) 南会津支会の取組について

南会津支会7校の道徳教育推進上の共通課題を明らかにし、実践に取り組んだ。

#### ○ 道徳教育推進教師を中心とした協力的な

指導体制の充実。校長が学校と地元をつなぐリーダーシップを発揮。

- ・ 下郷中 「ふるさとに学び、よりよい生き方を追求しようとする生徒の育成」地域体験活動、地域について学ぶを柱に「ひと・もの・こと」をつなぐ。
  - ・ 檜枝岐中 小・中の道徳教育推進教師を中心とした研修体制の確立。互見授業、感想交流で授業改善。40分完結ワールドカフェ方式研修で効率化。
- #### ○ 「ひとづくり・きずなづくり・ふるさとへの誇りと自信づくり」のための道徳授業の充実
- ・ 下郷中 「郷土愛」を育む研究。豊富な地域資源を、授業や道徳教育と結びつけ「つなぐ」ICTを活用し、自分の考えをまとめ、共有し可視化。
  - ・ 檜枝岐中 自然体験活動、地域人材の活用、地域資料の活用、地域と連携し中学生歌舞伎を道徳教育と絡めて実践。ふるさとへの誇りと自信に。
  - ・ 檜枝岐歌舞伎 地域連携15年に。

## 2 協議内容

### (1) 視点について グループ協議

〈視点1〉道徳教育推進教師を核に、全職員が指導力を発揮して道徳教育を推進する機能的な協力体制づくり

#### ○ Aグループ

- ・ 小規模校で全職員が関わる強み。職員間の温度差が課題。学力向上に偏らない、心の教育のマネジメント。

- Bグループ
    - ・ 全職員がローテーションで道德教育に関わる。道德は経験年数に関わらず同じ土俵で実践でき、研修できる場となる。
  - Cグループ
    - ・ 人数が少ない中、全校道德や他校との道德、先生が入った道德など工夫。ローテーション道德は授業力の向上にも効果的。
- 〈視点2〉「ひとつづくり・きづなづくり・ふるさとへの誇りと自信づくり」のための、家庭や地域と連携した道德教育。
- Aグループ
    - ・ 公民館、震災未来館、区長等と地域連携。家庭の教育力の低下に、学校から子どもの変容を積極的に発信。人間関係の育成Q-Uテスト、学級づくり、自浄作用を高めるマネジメント。
  - Bグループ
    - ・ 家庭との連携。キャリア教育、道德教育の視点で地域人材の積極的活用。人材の掘り起こし。
  - Cグループ
    - ・ 家族愛をテーマに、我が子に手紙。全家庭が参加し家族愛を感じることができた。意見発表に終わらず、生徒の発表を深める手立て。

### 3 まとめ

#### (1) 田村市立船引中学校 助川 徹

- 田村支会9校の中で「つなぐ」をキーワードに、校内で人と人を、学校と学校外を校長がつなぐ体制づくりと教員の意識改革が確実に実現。
- 校長と担任との協働授業、ローテーション道德等、授業力を高めるよい機会が提供されている。校長の授業の代案として、式辞、集会時の道德的価値も有効。ローテーション道德の評価では、ロイロノートを用いた教員間の情報共有も効果的。また、保

護者アンケートから学年テーマを設定した互見授業も好事例。

- チーム学校として、校外との連携は、生徒や地域の実態を的確に把握したマネジメントが大切。諸活動とリンクした道德の授業は、効果が大きい。
- (2) 下郷町立下郷中学校 我妻 雄比古
- 心の教育の充実、道德の時間を中心に据えた指導体制。心の状態を良くすることにより、学ぼうとする意欲が高まり、教師の指導が受け入れやすくなる。
  - アンケートの結果、郷土の良さを実感している生徒が少ない。8割の生徒が町外で過ごしたいと回答。郷土への愛着と誇り郷土愛を中心に道德教育を展開。教頭、校長が地元出身。その強みを活かして地域との連携。
  - 地域から生で学ぶ経験。家庭や地域と連携した実践には、校長の方針とリーダーシップが不可欠。
  - 中学生の歌舞伎。ふるさとへの誇りと自信。教職員に投げかけたスローガン。15の春。檜枝岐では高校進学で親元を離れる実態。それを見据えたマネジメント力を地域と協働に養うカリキュラムマネジメント。



#### 第4分科会

【発表者】	湯川村立湯川中学校	宮城 裕樹	いいたて希望の里学園	山田 徹
【司会者】	昭和村立昭和中学校	佐藤 隆彰	南相馬市立石神中学校	佐藤 恭司
【記録者】	玉川村立玉川中学校	板橋 敬史		
【運営委員】	会津美里町立高田中学校	坂口 伸	相馬市立中村第一中学校	中村 一宏
【責任者】	いわき市立小川中学校	三森 浩晶	福島市立信夫中学校	鈴木 豊

### 1 発表の概要

#### (1) 湯川村立湯川中学校について

湯川村立湯川中学校 宮城 裕樹

本県が抱える多くの健康課題は、各学校の実態に応じた取り組みにより改善傾向にあるが、依然として運動実施の二極化は顕著であり、新たな課題も出現している。そこで「健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実」の研究主題のもと、「食育の推進及び心身の健康の保持増進や感染症等の予防と対策に関する指導の充実」を柱として研究を進め、校長の役割や働きかけの有用性を分析・考察した。

A 中学校では、近い将来、生徒が弁当づくりなどを自分でまかなう必要が生じる実態をふまえ、食育を推進した。

B 中学校では、集団で運動する機会が減少してきていることから、教育課程の中に運動機会を意図的に設定した。

C 中学校では、家庭・地域との連携により、感染症の予防や対策について生徒自身への意識化を図る取組を推進した。



いずれの中学校においても、課題解決に

向けて研修会への参加を推奨したり、教育課程を編成したりする際の校長の指示や指導助言により効果を上げた。

#### (2) いいたて希望の里学園について

いいたて希望の里学園 山田 徹

東日本大震災や近年の地震被害により防災を含む生徒の身の回りに関する安全指導の見直しが課題となっている。またSNS上でのトラブル等も年々増加している。そこで、「身の回りの生活安全、交通安全、防災に関する指導及び新たな安全指導上の課題に対する指導の充実」を研究主題に、「防災に関する指導」や「情報化の進展に伴う新たな安全指導」などを視点に研究実践に取り組んだ。

「防災に関する指導」においては、校長自身が防災情報や避難訓練等の取組をHPで発信したり、震災を風化させない取組を学校だよりで周知したりすることで、教職員の意識の向上や教育内容の改善につなげることができた。

「情報化の進展に伴う新たな安全指導」においては、校長の指示の下、関係機関の協力を得ながらタブレット使用のルールづくりを行う等することで、適正なタブレット利用につなげることができた。

校長のリーダーシップが、迅速な課題解決や保護者・地域からの理解獲得につながった。



## 2 質疑

### (1) 防災教育に関する指導について

#### ◇ (富岡町立富岡中より)

防災教育や防災訓練を継続的な取組にする事例はないか。

#### ◇ (いいたて希望の里学園より)

教育活動の全体計画を作成する際に、重点目標を3年計画で作成し、その中に防災訓練等の諸活動を位置づけることで継続的な取組としている。

### (2) 防災教育に関する研修の充実について

#### ◇ (富岡町立富岡中より)

教職員の在任期間が短く、組織の回転が速い。職員が変わっても毎年同じ意識で防災教育を進めるためのよい取組事例はないか。

#### ◇ (いいたて希望の里学園より)

教育課程編成の際に、管理職の意識を変えないように工夫している。その上で、職員に方針を伝えるようにしている。

## 3 協議内容

### (1) 健康の保持・増進について

◇ 運動離れ並びに部活動離れが進んでいるため、特設部に全員加入するような取組を工夫している。

◇ 学校が管理しながら、自分手帳を活用することで、健康課題のある生徒の自己マネジメント力の向上を目指している。

◇ 学年や季節の実態に応じながら、帰りの学活終了後に運動や学習などに取り組ませている。

### (2) 食育の推進について

◇ SDGsの観点から、給食の残さを減らす取組を全校で行っている。

◇ 栄養教諭との連携を図りながら、「朝食を見直そう週間」などに取り組ませることで食に対する意識を高めている。

◇ 自治体の協力により、講師を招聘した上で、肥満傾向や痩せ形の傾向がある生徒への指導を行っている。

### (3) 防災教育について

◇ 学校の施設を再点検し、正しい使用方法を確認することで安全な教育活動を展開できるようにしている。

◇ 修学旅行を防災教育と関連づけた内容で実施している。

◇ 地域性から、噴火を想定した避難訓練を実施するとともに、地域の自主防災施設と連携した取組を行うことで、生徒の防災意識を高めている。

## 4 まとめ

### (1) 会津美里町立高田中学校 坂口 伸

学校の教育活動全体を通じて健康で安全な生活を送れるような生徒を育てていかなければならないことが学習指導要領に明記されている。校長として、教育活動が円滑に実施できるよう地域との連携をコーディネート及びマネジメントすることが大切である。令和2年に出された全日中の新教育ビジョン等を参考にしてほしい。

### (2) 相馬市立中村第一中学校 松本 一宏

継続的な防災教育、安全教育への取組や教職員の防災意識を高める工夫について、実践事例をもとに理解が深まった。震災から11年がたったが、安全教育、防災教育は手が抜けない。また、SNSトラブルへの対応も必要になってきた。本日の協議で話題となった内容を今後の各校の取組の見直しや改善につなげていただきたい。

## 第5分科会

【発表者】	郡山市立小原田中学校	菊池 博基	会津若松市立第六中学校	小川 茂樹
【司会者】	郡山市立高瀬中学校	齋藤 高志	猪苗代町立猪苗代中学校	横山 泰久
【記録者】	いわき市立玉川中学校	角田 健司		
【運営委員】	郡山市立郡山第六中学校	芳賀 俊幸	会津若松市立第四中学校	藤田 信一
【責任者】	喜多方市立塩川中学校	武藤 幸意	福島市立野田中学校	高澤 正男

### 1 発表の概要

#### (1) 郡山支会の実践について

郡山市立小原田中学校 菊池 博基

##### ◇ 研究の趣旨

「高い志をもって自立し、他と協働して未来を拓く子ども」の育成のため研究視点に基づき具体的方策について研究実践を行う。



##### ◇ 研究実践内容

#### 【視点1】キャリアパスポートの活用より

(A校の実践) キャリアパスポートのねらいを明確にして作成した。小中高のつながりを大切にし、自分の将来を考える際に自分の過去の活動を記録したものを振り返ることができるようにしている。

#### 【視点2】キャリア教育推進体制より

(B校の実践) 学校運営ビジョンにキャリア教育を位置づけ共通理解を図っている。また、学校運営協議会を立ち上げ地域を巻き込んだキャリア教育を実践している。

(C校の実践) 義務教育学校の特色を生かした9年間の学びの可視化モデルを作成し、人事異動があっても子どもたちがどのような学びをどの時期に行っているかが分かるようにしている。

#### 【視点3】家庭・地域・事業との連携より

(E校の実践) 地域コーディネーターにより学校のニーズに合った人材を選定してもらい職業講話を行った。また、学校運営協議会に企業との橋渡しをしてもらい職場体験を実施した。

(F校の実践) 地域人材、地元企業を職業講話や職場体験に活用し、郷土への愛着と誇りを育む取組を行った。

#### 【視点4】職場体験活動、職業講話の充実より

コロナ禍の中、次のような実践を行った。

- 公民館を通して地元企業の講師を依頼
- 職業に関わるWEBサイトを活用
- 身近な先輩からの職業に就いた体験講話
- 関係機関の協力による福祉体験活動
- 親や親戚など身近な人から学ぶ職業体験
- WEBによる体験活動プログラムの活用

##### ◇ 研究成果と課題

小中一貫したキャリア教育のためにもキャリア・パスポートを活用した小・中の連携がさらに必要となる。また、中学3年間を見通したキャリア教育の見直しも重要である。学校運営協議会や地域コーディネーターが学校と地域人材・企業との橋渡しをすることで、教員の負担軽減や事前指導の充実につながった。コロナ禍の中、これまで行ってきた教育活動を再評価し本当に必要なものは何なのか見極める必要がある。

#### (2) 北会津支会の実践について

会津若松市立第六中学校 小川 茂樹

##### ◇ 研究の趣旨

社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実に向けて校長としてどのように関わっていくかを明確にする。



##### ◇ 研究実践内容

- ①キャリア教育との関連を図った教育活動



会津伝統野菜を題材に地元企業と連携して系統立ててキャリア教育を行った。

## ②家庭・地域・事業所との連携

「スマートシティ会津若松」を支えるICT関連企業と連携し様々な人材を活用した。

## ③職場体験活動の充実

オンラインにより職業講話を開催した。

## ④キャリア・パスポートの作成と活用

様式が小中で異なり活用しづらい面があるが活用する生徒の立場を重視して学期の節目等の振り返りなどで活用した。

### ◇ 研究成果と課題

キャリア教育と学校運営ビジョンとの整合性を高める必要がある。地域や地域題材を活用したキャリア教育が地域理解を深め地域への誇りや愛着につながった。校長のリーダーシップによる地域との連携、人材活用が満足度の高い活動につながった。

## 2 質疑 特になし

## 3 協議内容（グループ討議）

### （1）グループAより

郡山市立御館中学校 大内 晋

#### ◇ キャリア・パスポートの活用について

様式や活用の仕方を検討する必要がある。

#### ◇ 学校と地域・社会との連携について

コロナ禍で職場体験ができない学校では、職業講話を実施し、その際、講師の人選、内容の摺り合わせを綿密に行い目的・ねらいに応じた活用が必要となる。

### （2）グループBより

白河市立白河第二中学校 小野 聡

#### ◇ キャリア・パスポートの活用について

計画的に節目節目で活用している。校長、担任や保護者のコメントを入れるなど対話的なものになるような工夫をした。課題として、小・中の連携は勿論だが、どのような使い方をしていたか高校との連携も大切にしたい。

#### ◇ 学校と地域・社会との連携について

天栄村立湯本中ではアントレ学習を取入れ、ふるさと教育を行った。檜葉中では、地域企

業とオンラインで情報収集を行った。向陽中学校では相双地区イノベーションコースト構想を活用し、地元を復活させるための提案をさせる学習を行った。SDGsに向けた先を見据えた取組を行っている学校が多い。

### （3）グループCより

いわき市立内郷第一中学校 小野 匡之

#### ◇ キャリア・パスポートの活用について

学校評価アンケートや人事評価にキャリア教育の視点を盛り込んで、組織的に取り組んでいる学校がある。キャリア・パスポートについては、作ってはみたが活用に至っていない学校や小中での協議が行われていないために今後検討・改善が必要。

#### ◇ 学校と地域・社会との連携について

市長が中学校に直接働きかけ行っている地域や村長が関わりボランティアネットワークが確立されている地域がある。コロナ禍で職場体験ができない状況もあり、今後校長がコーディネーターとしての役割を果たし機能させていく必要がある。

## 4 まとめ

### （1）郡山市立郡山第六中学校 芳賀 俊幸

キャリア教育の実践が子どもにとってどうなのかという判断基準をもち、地域の実態や地域のニーズを踏まえ中学生として何ができるかという視点で、校長がリーダーシップを発揮しながらプランニングすることが大切。これらの実践の最終的な目的は、子どもたちの進路の決定につながることであることを忘れてはならない。

### （2）会津若松市立第四中学校 藤田信一

校長としてこれまでの経験にこだわることなく、多くの実践に触れ自校の実態を踏まえながらキャリア教育と進路指導の充実に向けて進んでいきたい。その意味で校長会での研究や交流を深めていくことは重要である。

## 第6分科会

【発表者】	白河市立白河南中学校	橋本美智子	いわき市立中央台北中学校	松崎 伯文
【司会者】	白河市立東中学校	川口 和彦	いわき市立赤井中学校	川村 雅茂
【記録者】	川内村立川内小中学園	柳沼 敏文		
【運営委員】	棚倉町立棚倉中学校	深谷 昇司	いわき市立平第三中学校	日野 俊隆
【責任者】	郡山市立熱海中学校	佐藤 信也	桑折町立醸芳中学校	石綿 厚

### 1 発表の概要

#### (1) 【東西しらか支部】白河市立白河南中学校

##### ① 研究の趣旨

「個人と社会のWell-being」の実現を目指し、社会の中で自分の人生を切り拓いていくたくましさを持つことが求められている。校長として地域や自校の実情を踏まえ、生徒指導上の課題を的確に把握し、解決するためにどのような学校経営の方針を設定し、指導・支援をすれば良いかを明らかにするために実践研究を進める。

##### ② 考察

校長として各学校の状況に応じて、課題解決に向けた方策を教職員が一丸となって取り組めるよう指導・支援することが不可欠。このような継続の取り組みが個々の生徒の自己実現につながる。

#### (2) 【いわき支会】いわき市立中央台北中学校

##### ① 研究の趣旨

不登校になる前の早期発見、早期支援が重要である。また、日本の生徒は他国に比べ自己肯定感が低いことが指摘されており、自己指導能力を育成するために、自己に対する肯定的な認識を大切にしていく必要がある。自己に対する認識と不登校になりやすい生徒の相関関係が無いかを把握して早期発見、早期支援につなげていきたい。

##### ② 考察

「自己有用感尺度」と分析ツールを用いて試行実践を行い、自己有用感の低い生徒にやや欠席が多い傾向が見られた。自己有用感と不登校との因果関係が明らかになれば、そこに

配慮した教育活動を意識的に行っていくことで不登校生徒減少につなげることができると考える。特に自己有用感の低い生徒に授業以外の学校行事等で「自分がみんなのために役立っている。」と実感が持てるような役割を意図的に設定するなどして不登校を予防できるのではないかと。



### 2 協議内容

#### Aグループ報告

視点1 ◇ 今まで教師が企画運営進行をやっていた行事を、できる限り生徒が主体で実施する取り組みに変更した。

◇ 生徒の誕生日に校長が一人一人に本の葉をプレゼントする取り組みを行っている。

◇ 学級力アンケートを実施し、学級経営に生かす取り組みをしている。

視点2 ◇ 東日本大震災以降、専門性の高いSC等のフォローアップチームで、生徒全員の面談を行っている。

◇ 地元の福祉センターの職員と連携・協力し、子ども達の対応にあたっている。

◇ 通級のための加配配置があり、手厚く対応ができています。

## B グループ報告

視点1 ◇ ユネスコスクールの指定を受け、小学校から様々なイベントに参加させて自己有用感を高めている。更に他校と交流して、子ども達が主体的に活動し、自己有用感の育成が図られた。

◇ 制服のジェンダーフリー化を進めている。制服改定にあたり、生徒会が中心となって、ルール作りを行っている。

視点2 ◇ S S Rを設置し、学校生活支援員が常駐して、教室に入れない子ども達の支援にあたっている。

◇ タブレット使用の家庭学習では、S Eや家庭と連携しながら学習を進めている。

## C グループ報告

視点1 ◇ コロナ禍のため規制していた全校集会を実施して、子ども達の声が大きくなり元気になった。行事を1つ戻しただけで、子ども達に良い変化が現れた。

視点2 ◇ 保健室、図書館司書、S Cが2人いて、それぞれに常駐し、それぞれの場所で支援を行い、日誌の記録をこまめに取っている。それぞれの場所で得た情報を持ち寄り、全職員で共有して事例化し、指導に生かしている。

◇ Q-Uアンケートを実施し、効果的な指導に役立てている。

## 3 まとめ

### (1) 棚倉町立棚倉中学校 深谷 昇司

自己指導能力とは、その時その場でどのような行動が適切であるか、自分で考えて決めて実行する能力であり、ここでの適切な行動とは、自分のためになり、他の人のためにもなる行動と捉えることができる。

校長の立場で果たすべき役割として、自己指導能力の育成を目指した教育目標の設定を含む教育課程全般の立案について、全職員が関わり、校長の学校経営・運営ビジョンとの整合性を図り、校長のリーダーシップを発揮しながら全体的な指導体制・指導内容を具現化すること。生徒指導の目的が、生徒の自己指導能力の育成に

あることから、教育課程の編成に特に留意しなくてはならない。生徒指導の共通実践にあたっては、若手教員の資質能力や指導力の向上が不可欠。ベテラン教員やミドルリーダーと若手教員がそれぞれの強みを生かしながら、複雑化深刻化する生徒指導に関われる体制作りには校長のアイデアや助言が必要。さらに、個々の教員に生徒の全てを委ねず、学校や学年等の組織として、体系的・計画的に実践していく必要がある。



### (2) いわき市立平第三中学校 日野 俊隆

自己に対する認識と不登校との関係を調査し実態把握することで、不登校の早期発見・早期支援につなげていく点は、たいへん参考になる。更に自分が人の役に立っている、という気持ちに沿ってこの自己有用感を育む教育活動を実施すれば、不登校を防ぐことができるのではと考え、研究を推進することは、たいへん良いアプローチである。校長として家庭や地域社会、関係機関との連携を一層充実させながら、自己有用感を育み、不登校生徒を減少させていくか、植木鉢の世話をする生徒の取り組みなど、研究を更に継続し実践事例を集約して、研究の共有化してほしい。

複雑化多様化した生徒指導上の問題は、学校だけでの対応に限界がある。情報の共有化、どのような連携が効果的であるかを明らかにし、共有化しながら生徒指導の充実を図ることが大切である。

## 第7分科会

【発表者】	伊達市立松陽中学校	渡邊 定行	いわき市立田人中学校	高萩 雅人
【司会者】	伊達市立伊達中学校	阿部 裕好	いわき市立川部中学校	佐藤 英勝
【記録者】	郡山市立片平中学校	高原 栄治		
【運営委員】	伊達市立桃陵中学校	熊澤 正人	いわき市立錦中学校	渡邊 昌和
【責任者】	磐梯町立磐梯中学校	秋山 了	二本松市立岩代中学校	遠藤 康成

### 1 発表の概要

#### (1) 伊達支会の取組について

伊達市立松陽中学校 渡邊 定行

教員研修に関して、各学校の課題として4点挙げられた。そのため、県校長会「研究の手引き」にある3つの視点を基に、本支会では、校長としての重点的な関わりを4つ設定し研究を進めた。

実践を通して、視点1については、校務分掌の再編による当事者意識の喚起や人事評価目標設定等を通して、教員の参画意識を高めることができた。視点2については、互見授業の実施や小中一貫校における共同現職教育の推進により授業改善と専門性向上が図られた。視点3については、校種間・地域・行政当局との協働などにより教員の学校経営に参画する意識が高まった。課題として、個々の教員の強みを生かした資質・能力の育成等3点挙げられた。

#### (2) いわき支会の取組について

いわき市立田人中学校 高萩 雅人

まず、各校が自校の教育課題について整理し、課題に基づいて各校が実践、成果・課題を共有するという研究を1年次とした。A校では、知ってほしいことや守ってほしいこと等職務命令を柔らかな形で伝えるために、校長だよりを毎週1号ずつ発行している。B校では、「主体的・対話的で深い学び」へ授業改善するために生徒による授業評価を導入した。

調査・評価には、GoogleFormsを活用し、短時間でできる工夫をした。C校では、生

徒のWell-beingは教職員のWell-beingという方針の下、全職員にアンケートを実施し、見える化している。また、「オフサイトミーティング」を実施し、なんでも言い合える人間関係づくりに力を入れている。D校では、ベテラン教員と校長が協働でプロジェクト会議を進め解決を図っている。ベテラン教員の士気を高めるとともに、人材育成等教員の自信にもつながっている。各校がいずれも自校の現状を踏まえ、校長が主体となって進めている実践ばかりである。今後、実践結果の検証を図りつつ、研究成果の共有を推進していきたい。



### 2 質疑

#### (1) 伊達支会の取組について

◇(草野中より)視点1について。RPDCAサイクルであると思うが、どのようなタイミングで評価しているのか。本校では7月と12月だがお聞きしたい。

(答)他校の事例であるが、年度末等ではなく、何か行われた後にそれぞれ評価している。そして、次年度の教育課程編成に生かしている。

### 3 協議内容の報告

#### (1) 郡山市立三穂田中学校 阿部 博

- ・ ICTの活用には、アドバイザーに常駐化していただいた。
- ・ 授業研究会については、子供たちがどのように学んでいるのかを視点として、定期的開催している。事後は、小グループ編成にして共有している。各学年3回ほど実施し、市教委より指導主事を招いて助言をいただいている。
- ・ RSTや人材活用について、地教委と情報を共有しながら互見授業を実施。
- ・ 人事評価については、アドバイザーシートを用いて違いを明確にした。

#### (2) 大熊町立学び舎ゆめの森 佐藤 由弘

- ・ 自分ごととして受け止められているか、人事評価の目標に挙げられているか、一人一人言語化できているか、それらをポイントとして校長がチェックする。
- ・ 働き方改革の視点で、行事の精選が必要だが、子供たちにどんな力を身に付けさせられるかを考えなければならない
- ・ 一人一人の授業力という点で、各学校の強みを生かして行うことが鍵になる。
- ・ 義務教育学校では、小・中ともに教科担任制で、日常的に互見授業が教科ごとになされている。9年間のスパンで生徒の力をどう見ていくか、授業をどのように変えていくか、を見ることができる。
- ・ 小規模校で一教科一人しかいないため、RSTを活用し指導に当たっている。

#### (3) 鮫川村立鮫川中学校 相馬 慶二

- ・ 教職員の意識改革をいかにするか、年齢構成等学校によって状況が違う。そのため、校長がリーダーシップを発揮しながら、人事評価を活用していく。
- ・ 指導力を高めるために研修は必要。学校の実態に合わせた研修をする。
- ・ 校内研修では、授業改善のために日頃の授業を互見授業とする。そして、現職だよ

りで良かった部分を共有している。

- ・ 指導力向上のために、校長が授業を見ることが大事。授業を見た上でどのように改善に生かすか、助言や称賛をしていく。



### 4 まとめ

#### (1) 伊達市立桃陵中学校 熊澤 正人

研究の3つの視点と校長としての4つの関わりを組み合わせ各々が実践研究を進めている。研究の捉えが正確になり、支会全体で同じ方向性で研究が進められている。実情に合わせて自ら校長の関わりを選択したので、具体的な研究実践ができた。今後、支会全体で明らかになった課題を共有する機会を持ち、新たな実践に向けた方向性を見出す。管理職として、サーバントリーダーシップという視点で学校経営を実践していくことが重要になっていく。

#### (2) いわき市立錦中学校 渡邊 昌和

いろいろな状況を抱えながらそれぞれの校長がそれぞれの課題に取り組んでいる様子を共有し合う会になった。

我々の課題は人・組織を育てていくこと。課題の多い時代になった。コロナ・ICT・働き方改革・異常気象、そんな時代に我々校長が学校の特徴を生かしながら取り組んでいくために、校長同士が意見交換する場になった。

校長の視点で道筋を示し、目標を実現すべく学校のかじ取りをしていくために、我々校長が連携していくことが大切。

## 第8分科会

【発表者】	福島市立吾妻中学校	渡部 正晴	平田村立ひらた清風中学校	酒井 一憲
【司会者】	福島市立蓬萊中学校	中村 徹	古殿町立古殿中学校	上野 康生
【記録者】	南会津町立舘岩中学校	室井 辰生		
【運営委員】	福島市立福島第二中学校	丹治 光夫	石川町立石川中学校	富岡 信
【責任者】	南相馬市立鹿島中学校	高橋 知宏	二本松市立東和中学校	齋藤 直

### 1 発表の概要

#### (1) 福島市立吾妻中学校 渡部 正晴

生徒に必要な資質・能力を育むために、学校と地域の双方向で連携・協働する組織的・継続的な取り組みがとても大切である。また、生徒と向き合う時間確保のために教職員の負担軽減と働き方改革につなぐ意識も大切である。校長として効果的な関わり方の研究実践を行った。

#### 研究の実践の報告

- ① 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営のあり方
- ② チームとしての学校と地域の連携・協働体制のあり方
- ③ チーム学校の実現と教員の働き方改革のあり方

#### 研究のまとめ

地域連携本部の活用による地域と学校が連携した教育活動は、質の向上に有効であった。

SC、SSW、SSS、部活動支援員等の活用は、専門的知識・技術が生かされ、生徒の困り感への対応や生徒の動機付け、教職員の負担軽減などチーム学校の強化につながった。

校長の役割は、人材を活用するメリットの説明、人材を活用するための諸準備（物的、金銭的、業務内容の整理等）、関係機関との調整、教職員の役割を明確化することである。学校運営ビジョンを示し、校長が率先して組織を動かしていくことが大切である。

#### (2) 平田村立ひらた清風中学校 酒井 一憲

本年は、多様な人材の専門性を活用した学校の在り方について、各学校の実態把握と課題の明確化を図るため、以下のアンケートを行い、支会として成果と課題をまとめた。

- ①SC
- ②SSW
- ③部活動指導員
- ④ICT支援員
- ⑤ALT
- ⑥特別教育支援員
- ⑦学校司書
- ⑧SSS

多様な人材を効果的に活用するための校長の役割については、校長がリーダーシップをとり、学校の実態把握をすること。教育委員会と連携を密に、人材配置について連絡調整を図ること。校長自らも人材の発掘に努めること。他校との実践例を共有し、教職員に適切な指導助言をすること。信頼関係や働きやすい環境を整えること。教職員の多忙化解消のために多様な人材をフルに活用できるよう積極的に働きかけを行っていくことが必要である。

#### 研究の実践の報告

ICT支援員を講師とした校内研修会の事例と部活動指導員との年度当初の話し合いの事例。

#### 研究のまとめ

複雑化・多様化している教育課題に、教職員だけで向き合うことの難しさがある。専門性を生かした多様な人材を活用することで、解決する糸口を見つけることができ、支会の5校が活用法を共有することで、各校の不安感を軽減できた。

多様な人材活用により、学校の組織力、教育力を高める効果があり、教職員の多忙化解消にも繋がっている。今後、地域学校協働本部事業との連携を密にしていくことも必要である。

## 2 質疑（特になし）

## 3 協議内容

### (1) Aグループ（上遠野中 佐川 一夫）

◇ 自殺願望がある生徒のような特殊な例では、医療機関やSSWとつなぎ、重大事案であることから、校長のリーダーシップが最重要であった。

◇ 外部人材の活用では、窓口が一本化されているところとそうでないところがあり、地域連携担当教員の活躍の場も厳しく、今後の大きな課題となっている。

### (2) Bグループ（会津柳津学園中 高橋哲郎）

◇ 多様な人材確保では、県や市から生徒指導の人材配置がある。不登校生徒の対応で元校長の対応を通して地教委と連携しながら進めている。

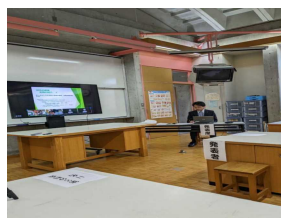
◇ 部活動指導員については、校内や地教委と連携しているが、予算面や平日に指導できる人は限られ、発掘が難しい。

◇ 地域連携担当教職員について、教務主任、教頭、主幹教員、地域のコーディネーターを活用して進めている。公民館と横のつながりでも進めているが、これからのところもある。

### (3) Cグループ（湖南小中 吉井 史之）

◇ 視点1について、コロナ禍で地域との連携がしにくい。公民館や行政と連携しながら地域人材活用をしている。地域コーディネーターの活用もある。問題点として、SSWとの連携をどうするかや部活動指導員の活用について話題があった。

◇ 視点2について、職場体験学習は、受け入れが難しい。校長として積極的に電話をして関わっていきたい。また、地域との協力体制作りが必要である。



## 4 まとめ

### (1) 福島市立福島第二中学校 丹治 光夫

・ 人材の活用については、コロナ禍で行事を行うか悩んだ時に、学校医・学校薬剤師・学校歯科医・眼科医などの医療スタッフとの連携は、校長の学校経営の視点として大きい。

・ 不登校や生活がうまくいかない保護者には、民生委員や民生児童委員との情報交換により、子供食堂に繋いでくれたり、地域事情を教えていただいたりした。

・ 地域学校協働連携の一つとしてコミュニティスクールがある。以前は、学社連携として、学校教育と社会教育の連携があった。学校経営で、その視点に至った経緯を振り返り、もともとどうであったかを捉えていくとよい。

・ 経営課題はたくさんあるが、できるところから成果としてあげ、チーム学校として校長が直接話をしていく必要がある。

### (2) 石川町立石川中学校 富岡 信

・ 多様な人材はいるが、どこに重きを置くか校長として見極めることが大切で、教育委員会等へ要望をしていくこと。例えば、SSRの加配をぜひ、と言ったところ支援委員の配置をいただいた。

・ 教員の力だけでは限界があること。何のために地域と連携をするのか。教員の役割の明確化、生徒に向き合う時間確保、働き方改革等のためである。

・ 校長として教職員にビジョンを示し、体制を整備すること。地域と連携する雰囲気や上手につくっていくことや部活動の地域移行等も大切になってくる。

## 県北（伊達）大会を振り返って

平成28年、9年ぶりに県単独の研究協議会を「いわき大会」として開催し、平成30年には「福島県中学校教育70年記念式典」及び「第46回福島県中学校長会研究協議会県中・県南大会」が石川町母畑温泉八幡屋を会場に開催されました。

これまで、隔年実施で開催されてきた研究協議会ですので、令和2年は「第48回会津大会」の予定でした。しかし、令和2年当初より猛威を振るった新型コロナウイルス感染症の影響で、中止となりました。

今年度4年ぶりの県大会「県北」開催となり、「第50回伊達大会」として引き受けていただいた、伊達支会長の阿部央校長先生をはじめ、伊達支会の校長先生方、さらにはオール県北の大会としてご協力いただいた福島・安達支会の校長先生方に心より感謝申し上げます。

今回の大会はコロナ禍の開催ということもあり、新たな研究協議会の形態を探る「ハイブリッド形式」で行われました。会場も学校を使用して開催するという、これまでの実績や累積資料のない中で、県北地区の校長先生方には、昨年11月からの綿密な計画の下、一丸となってお尽力いただき、成功裏に終了することができたことに、重ねて御礼申し上げます。

10月初旬としては異例の寒さとなった大会当日は、会場である伊達市立梁川中学校に、県北地区及び次年度東北大会を控えている会津地区の校長先生方、さらに発表・司会等を担当する校長先生方約100名が参集し、その他の校長先生方はオンラインで参加するという形で実施されました。記念講演として、伊達市教育委員会教育長の菅野善昌様に「感染症予防の徹底とコロナを言い訳にしない教育」を演題としてご講演いただきました。

午後には大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」のもと、8分科会による小主題に基づく各支会の研究発表及びオンラインによる熱心な研究協議が行われました。

社会状況が大きく変化し、先の見えない時代に生きる子どもたちに求められる力の育成に向け、「校長としての在り方、使命」を確認する実り多い大会となりました。

大会成功に向けてご尽力いただいた分科会研究発表者である各支会研究担当の校長先生方、そして、県北地区の実行委員会の校長先生方をはじめ、関係の皆様にご感謝申し上げますとともに、本大会が今後の県校長会協議会の発展に寄与することを祈念してあいさついたします。

福島県中学校長会研究部会長 鳴原 俊洋（福島市立渡利中学校）

第50回福島県中学校長会研究協議会県北大会

発行日 令和4年11月30日

編集 県北大会実行委員会



